

(7) 学究上の好機運に乗じた本学新施設

来年度予算に五万円を計上し私経済研究に

一転期を画する

企業経営研究所設置

近時我国における商業教育施設は加速度的進歩を見せ、健全なる歩調を示してゐるが、識者間には尚一層これを完備せるものとせんと唱ふる者多く、書机上の学問たるを斥け、広く社会と密接なる關係を有せしめんとする思想、学界一般にび漫し年々その度を増大するは世界の学界を通じて見らるゝ新傾向にして、我国においても既に数年以前教授会にてかかる形勢を生じてより、各国私経済研究設備の調査を高垣、井浦両教授によりて着手し、その結果本学にもさう合的研究所を設置することゝなり、じ後年々予算中に計上提出してゐたが不幸今日に至るもその実現を見るに至らなかつたが、今年本部当局の要求にて更に詳細なる予算を編み合計五万円にて本学に企業経営研究所を設置し私経済研究に資することになつたが、既に欧米各大学においてはかかる施設を有するもの少からず、ただに企業経営に関する研究上各教授、学者に与ふる便益の僅少なからざるのみならず、同所の調査研究の結果をその都度発表することにより企業社会一般の経営知識に貢献する所も少からざるものあり、商工教育の諸知識修得実行に力を注ぐ目的で中橋徳五郎氏を始め本学々長佐野善作氏等も加はつて組織された

商工審査会の重要研究題目の一たる商業教育の整備を実現するにも最適有力なるものであり、私経済研究完成も大学と研究所の並置に依り始めて期し得らるゝ所で、一日をも輸し得ざる緊急を要するもので、黒川事務官の縷々当局に説明なせる他高垣教授の起草の建議案も既に提出されたので、文部当局にも明かにその要を認め賛意を表する者多く、少数の同一目的を有する大学とかかる研究所は重複するものなりとの反対論者もあるが、時潮はこれを許さざるべく、学校当局も是非でも来年度予算に成立せしめんと運動中であるからその実現は遠くはあるまいと。

第五六号(昭和二年八月一日)

(8) 研究調査には専ら助教教授担当

調査報告書も印刷発行

研究所の組織については連年高垣教授、井浦教授等の鋭意熱心に調査研究せられた結果、命令一下直にそれを組成し得るの準備がしてあるとの由であるがそく聞する所によれば所長一名、教授二名、助教教授五名助手五名を置き外に学生等を参加せしめて研究調査に専ら助教教授が当り教授はこれを指導し助手はこれを補助し材料の蒐集整理等に當る様な仕組とし、建物は現在本学内にあるものを使用し成るべく経費を少くする心算である由、尚調査研究の結果は日本の旧慣を破り印刷に付し何等かの方法によりあまねく他の学校、会社等に分ち私経済に関する研究に効果らしめ、学理と實際の背反せる時弊をきやう正する様に努力するさうであり、私経済研究所のない我国としてこの種の機関

の必要は誰しも感じてゐる事であるから、当局も識者の賛成を得て予算の通過する事を希望してゐると。

多年の宿望を実現したい

高垣教授談

企業経営研究所の計画は兩三年前からあつて諸教授も双手を挙げて賛成し、先頃私が文部当局へ出す建議案を起草しましたが、従来何方かといふと私共は学問研究を直ちに社会に関係づけて行ふのは学問の習慣であるかの様に金殿玉城と立てこもる方であつたのですが最近の世界の学界を見るのに学問研究にも何等か社会的貢献なる考を容れてなすべきものではないかとの考が次第に濃厚になつて来、諸研究所の組織についても世界各国のものを井浦教授、増地助教等と共に調査した所ハーバード大学もベルリン商科大学もそう合的研究所を持ち、キールの大学も海運に関する特殊研究所を持ち、企業経営研究上に幾多の便益を得てゐるのを見て我國にも一つ位かかる研究所は必要で、これを有つて始めて完全な研究を行いうるものといふべきで、今年是非成立を希望してゐます。尚文部省も近時大分乗氣に成つて、詳細の問ひ合せもくる所を見ると十分成立の可能性があると思へる。

第五六号（昭和二年八月一日）

(8) 宣言

全一橋同人に告ぐ。

現下予科生活の看過し得ざる沈滞については吾等のしばしばこれを耳

にし、又自らその責任を感じ来つた所であり、吾等の生活の眞摯なる自己批判が必然的に要求せられたのは実にこれがためである。乃ち、吾等有志は予科生活批判会を組織し、既に数回にわたつて凝議しつゝ、深刻なる自己批判を試み来つた。

惟ふにこの因たるや、一面同人の自覚闕如に基くといへども、他面制度の欠陥によることまた多大なりといはざるを得ない。時代の進展に取残されたる因襲的制度は伸びんとする吾等の生活を伸び得ざる状態に置き、その正しき發展を阻んでゐる。

素より複雑なる社会の現状と特に吾等予科に恵まれざる環境とが自然吾等の生活におよぼす影響もまた甚しいとは認むるも、吾等は徒らにこれを甘受し了すべきに非ず。正当なる判断と眞摯なる態度とをもつて、予科に現出せられたる現代教育制度の幾多の欠陥を敢て改善せんと力め、飽くまで最善を尽すことこそ真に吾等の一大義務であると信ずるのである。

抑々制度革新の叫びは先に吾等の先輩によつて既に起つたのであるが未だ具體的なる成果は得られなかつたのである。

かくて予科創立以来八年の歴史は当面の情勢と共に吾等にその根本的改善を求めて止まず、今にして革新の炬火をかざさずんば、又何時の日にか予科の本質を確立し得やうか。

「予科は一橋活動の中心たるべし」と信ずる吾等は、今や当局の一大展開を図り、尚、前途多事多難なるべき一橋学園のために十分なる決心と自重とをもつて、吾等の生活を改善せんことを要望するのであつて、これ実に予科の革新が独り吾等予科生の問題たるのみならず、実に全一橋の問題なりと考ふる所以である。従て吾等は、先輩、教授、